

LegenLife～レジエンライフ～

零華～幻～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界には、魔法というものが存在している。

魔法は誰でも使え、基本、ちよつとした攻撃魔法や治癒魔法が使えるが

蘇生魔法や即死させるような魔法。

いわゆる超魔法と呼ばれるものが使える人間が稀にこの世に生まれてくる。

超魔法が使える者たちは『レジエンダリー・フラクト』
《伝説の命》と呼ばれる。

そんな能力のせい、不特定多数より命を狙われることも多い。

中には幼少期の、まだ才能が開花する前の段階で暗殺されてしまう者もいる。

その事態を防ぐため、120年ほど前から0歳から18歳のものを対象に

各地の施設にて保護され、自身の身を守るための訓練を受ける。

その中でも飛び抜けて能力の高いレナ、レイの双子が先日18才を迎え

とある大富豪であり、強力な魔術師にメイド（執事）兼護衛として引き取られた。

二人にとっては喜ばしいことではなかった。

その理由。それは理想のものではなかったからだ。

施設で共に暮らしていたいた人たちには祝福されたが

二人の理想。それは……

《伝説の命》など関係なく平凡に、穏便に新たな家族と共に暮らしてい

く。それが二人の理想だった。

しかし、その儂い希望は引き取り手である魔術師によって打ち砕か

れた。それにより感情の起伏が表情に出なくなってしまった双子の弟・レ

イ。それを見た双子の姉・レナは復讐を決意をする。

そこから始まる物語を知るものはまだ存在しない……

目次

第一章 一節 それは、絶望の物語

第一章 一節 それは、絶望の物語

..... 血の匂い。訓練で嗅ぎ慣れた匂い。私もレイも。

..... この世界には魔法というものが存在する。

魔法は誰にでも使え、基本はちよつとした攻撃魔法や治癒魔法が使える程度だが。

蘇生魔法や即死させるような魔法、いわゆる超魔法と言われているものが使える人間がこの世に生まれてくる。

超魔法が使える者たちは『レジエンダリー・フラクト』通称《伝説の命》と呼ばれる。

その能力のせいで命を狙われることも多く、幼少期の才能が開花する前に暗殺されてしまう者もいる。

それを防ぐために120年ほど前から0歳から18歳のものを対象に各地の施設で保護されている。

保護されると訓練を18歳まで受け、施設を出た後自分の身を守れるようにする。

..... 今、私とレイはまさに施設で保護され訓練を受けている。

私とレイは、普通の人間である母と《伝説の命》である父の間に双子として生まれた。

確立で言えば本来はどちらも普通の人間か、あるいは片方が普通の人間で片方が《伝説の命》で生まれてくる。

しかし、奇跡に奇跡が重なったのか..... 私たちは二人とも《伝説の命》で生まれてきた。

そのため二人とも保護され訓練を受けている。幼くして保護されたため、母と父の顔は覚えていない。

訓練は最初こそ苦痛など無く楽しかった。でも、時が経つにつれて楽しさは消え、苦痛となった。

毎日毎日繰り返す。戦い、返り血を浴びる日々。もう慣れた。でも、命を奪うこの行為は嫌だ。

..... 訓練のためだけに、私たちのためだけに奪われていく命。当たり前

のように奪われていく。

私たちはこんな事をしたいわけじゃない。… いや。むしろしたくないのだ。私もレイも。

私たちはずっと、ずっと、何年も前から話していた。私たちの理想の生活。それは…

普通の人間たちのように平凡に、平和に、暮らすこと。命を奪う必要のない。穏やかな生活。

レジェンダリー・フラクト 《伝説の命》なんて関係なく暮らしていくこと。

そんな生活をしたい。この施設から出ることができたならレイと新しい家族とで静かに…

そんなことを考えている間に訓練の時間が終わる。終わると同時にレイが私の元へ走って来る。

「レナ〜！聞いて聞いて〜！今日の訓練ね！成績一位だったよ〜！」

「それ毎回じゃん！wでもよく頑張ったね！おめでどう〜！」

「うん！… でもレナも毎回一位でしょ？何で喜ばないの？」

私は黙り込んでしまう。双子の姉として、嫌だとか、嬉しくないとか、弱音をいつてはいけない。弟を不安にしていけない。そう思っていたから。

「レナ…？どうしたの？何で黙ってるの…？何でうつむいてるの…？」

恐らく心配してそう問いかけられているのに、私はプツンときてしまった。

「今まで思いを溜めていた分、感情的になってしまったんだと思う。

「…この訓練は嫌いなもの！何の罪もない、ただ訓練のためだけに集められた外の人たち。それを当たり前のように殺していく私たち…自分で言うのもなんだけど、訓練を受けている時に平気で武器を振り、人を殺している自分がすごく嫌い。考えているだけで反吐が出る。」

私は熱が入り、つい言い過ぎてしまった。気づいてはつとした時にはもう遅かった。

レイの瞳は罪悪感を抱えているのと、自身への嫌悪を思わせるように黒く光っていた。

「レナ：　なんかごめん：　僕、無神経にレナに聞いちやった。少し考えれば、レナのこと考えれば、レナからの答えはこうなるって分かっていたはずなのに：　僕のためにレナは感情を抑えてたのを知っていてはずなのに：　僕は：　僕は何で：　こんな事を：　レナに：」

私こそ分かっていたはず。この事に関しては：　レイのほうが人一倍嫌っており：

人一倍訓練で当たり前のように人を殺し、命を奪っている事に罪悪感を持っていて、そして：

人一倍、誰よりも自身を嫌悪して嫌っている事を。それを思い出さないように明るく考え、明るく接して自身を偽っている事を。分かっていたはず。

レイの手は強く握られ、今にも血が出そうになりながら細かく震えている。

目からは大量の涙。その瞳からは変わらず罪悪感と自己嫌悪を思わせている。

「レイ：　嫌なこと思い出させてごめん：　ごめんなさい：　！」
私は懸命にレイに謝り、慰めていた。そんなことが償いになどならないと知りながら。

そう。これは私たち双子の絶望の物語。